九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

慶安五年刊『訳和和歌集』翻刻と解題 附校異（一）

内野, 優子
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/10337

出版情報：文獻探究. 39, pp.46-67, 2001-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

慶安五年刊『訳和和歌集』翻刻と解題　附校異（一）

内野　優子

一　はじめに

室町後期の僧実海（一四四六生～一五三三没）は、川越喜多院に住した天台の学僧である。実海の人となり及びその著作については、『本朝高僧伝』注1巻十八で次のように伝えられている。

武州喜多院沙門實海傳

釋實海。武州川崎人。（或曰品川）自レ幼俊利。思出二羣童一。早入二教寺一。剃髪肄レ業。嘗在二檀越大田道灌宅一。呼二僕夫一曰。將二盥水之水一來。（俗語洗顔謂為手水）道灌在レ傍曰。盥水而足矣。將非二剩語一乎。海曰。若唯盥水。或持レ湯來。道灌動レ容深服二敏捷一。長渉二論場一。負二魁博名一。住二星野山喜多院一。關左台徒負レ笈逼塞。化衆之暇著二述夷希集徹塵各十巻。鹽味集二巻。教觀大綱見聞鈔三巻一。天文二年示寂。壽八十八。在二星野山一。時。有二莫禮者一。兇惡無レ比。死日請レ海送レ終。化人來曰。彼罪彌天。必莫二法救一。海謂。釋氏之道善惡齊利。豈忍レ拒レ之。乃整二威儀一出二於郊外一。俄怒雷轟レ天。電掣迸レ空。海擧レ扇曰。我代受レ苦。須臾雷止雲收而克レ葬。海寂三年。寺後杉上有レ聲曰。我代二莫禮一入二地獄一受レ苦。今已免レ之。即不レ見矣。

賛曰。一切如来大慈悲観音。一人代受レ苦。海之言迹與レ經符合矣。夫内祕菩薩之人也與。

『国書総目録』によれば、ここに挙げられている著作の他に、数十点にも及ぶ仏典の注釈書、論義書が残されている。しかし、それらの類の他にも、法華経歌集の嚆矢ともいうべき作品がある。それが『訳和和歌集』（法花訳和集）である。この歌集は、法華経二十八品と開結二経に関する既成の釈教歌を各品ごとに集め、それらの歌に注を施したものである。

二　先行研究

『訳和集』を中心に据えた研究は、これまであまりなされていない。昭和五十八年の仏教文学会において、塚田晃信氏は、『訳和集』の諸本には大きく二つの系統があることを指摘された注2。そ

の後、毛利みのり氏が、『訳和集』の中で、最も多く収録されている慈鎮（慈円）の『拾玉集』に着目し、第一系統の『訳和集』所収の百一首は、全て九州大学支子文庫本『拾玉集』所収の百二首に含まれることから、石川一氏が提唱されている『法華要文百首』の四つの系統のうち注3、一類本に一致することを示された。また第二系統の『訳和集』については、『訳和集』成立以降に、他系統の『法華要文百首』の影響を受けていると指摘、さらに、元禄四年刊の『説法用歌集諺註』が、第二系統の『訳和集』をもとに編纂されているということを明らかにされた注4。

また、廣田哲通氏は、実海が編んだ『轍塵抄』は別として注5、『一乗拾玉抄』、『法華経鷲林拾葉鈔』、『法華経直談鈔』、『法花直談私類聚抄』といった中世直談物の法華経注釈書系における和歌と、『法華和語記』、『訳和集』、『類題法文和歌集注解』などにおける法華経歌集系の和歌とは、様相が異なっており、法華経歌には明らかに二つの系統があることを示された注6。氏は、『訳和集』以降の、法華経歌集の系譜とその周辺について、『類題法文和歌集注解』『片岡山』、『釈教題林集』といった類題歌集的性格の書と、教化の具としての性格をもつ『説法用歌集諺註』とを挙げておられる注7。

しかし近年、高木豊氏により、嘯月子による『科註妙法蓮華経鈔』（寛文十三年刊）という法華経注釈書にも、『訳和集』（高木氏は『法華訳和集』と呼ばれている。）が引載されていることが指摘された注8。『科註妙法蓮華経鈔』とは、江戸時代、特に十七世紀中に、『科註妙法蓮華経』の和刻本が盛んに刊行されているが注9、それを仮名本に仕立て、さらにわかりやすく仮名で注を加えたものである。経文には左側に字音読みの振り仮名が、右側には漢文訓読の振り仮名が平仮名で表記され、元々ある注の後に、編者嘯月子の注があり、さらにそれぞれの注釈の最後には、経文の内容に関連する法華経歌を載せている。『訳和集』の実海注は、そのまま取り込まれているものもあれば、省略されているものもある。『科註妙法蓮華経鈔』の中の「法華経科註惣序の上」にある「科註假名書きの事」には、「…（前略）…さればことの葉は。國によりておなじからずといへども。理はりはいづくにてもかはることなし。此の日本のならひとして。そのことばをかんなになをし。又経文を題としてよみをける。古き哥をもまじへ。善男子善女子は。いふべくもあらず。いやしき女わらはべも。難波津浅香山にだに入ぬれば。これをよみとかずしもあらず。そのふかきことはりを。やすくしらしめんがため。かうやうにかき侍るも…（後略）」注10 述べられている。このような意図のもとに編まれた『科註妙法蓮華経鈔』には、四四四首にも及ぶ和歌が引載されているが、平仮名のルビを付し、平易な表現で注釈と和歌を施しているとはいえ、硬質な格調を失わない大部の法華経注釈書である。実海の『訳和集』が、先に挙げた法華経歌集の系譜の他に、このような後代の法華経注釈書にも影響を及ぼしていることは、非常に興味深い。

三　『訳和集』諸本について

『訳和集』諸本は現在、大きく二つの系統に分けられるとされている。それは、題名の違い、大まかに言って写本か刊本かの違い、

そして、八巻本か五巻本かの巻数の違いによる。またもちろん本文のレベルにおいて、かなりの差異が見られる。毛利みのり氏の論文に拠り注11、それにまた少し付け加えて二系統を整理すると、次のようになる。

【第一系統】

・内閣文庫蔵『譯和和歌集』（江戸初期写本八巻一冊・和歌五〇一首）

・龍谷大学大宮図書館蔵『〈内題〉譯和集』（写本八巻二冊・四九八首）

・天理図書館吉田文庫蔵『譯和々歌集』（写本八巻二冊・五〇三首）

・ノートルダム清心女子大学黒川文庫蔵『譯和集』（江戸中期写本八巻二冊・五〇四首）

・島原図書館松平文庫蔵『釋（ママ）和和歌集』（江戸初期写本八巻二冊・四九四首）

・彰考館蔵『訳和倭歌集』（写本一冊・巻一、八欠）

【第二系統】

・京都大学蔵『法花訳和集』（承応二年刊五巻五冊・風月庄左衛門・五一一首）

・立正大学蔵『法花訳和集』（承応二年刊五巻五冊・風月庄左衛門・五一一首）

・国文学研究資料館蔵『〈内題〉法花訳和集』（承応二年刊五巻五冊・風月庄左衛門・五一二首）

・静嘉堂文庫蔵『法花訳和集』（江戸末期写本五巻五冊・五一二首）

この他に『国書総目録』によれば、徳島県立図書館蔵『法花訳和集』（承応二年刊一冊）、宮内庁書陵部蔵『訳和和歌集』（写本二冊）、東京国立博物館蔵『訳和和歌集』（写本一冊）。『私撰集伝本書目』によれば、彰考館蔵『訳和集』（慶安五年刊一冊）、立教大学蔵『法花訳和集』（承応二年刊五冊）。また『国文学研究資料館マイクロフイルム資料目録』には、長谷寺豊山文庫蔵本（抄出本）が、さらに『国文学研究資料館和古書目録』（一九七二―一九九七）によると、国文学研究資料館蔵〈外題〉『譯和集全』（〈内題〉『譯和和歌集』慶安五年刊一冊・風月庄左衛門・四九九首）が現存することが知られている。

そして最近のことであるが、一誠堂古書目録（平成十二年秋季号）で、梶井宮家旧蔵『訳和集　上』（江戸初期慶長頃写本・下巻欠）が写真版で一部掲載されていた。管見の限りでは、これまでの伝本中最も集付が施されている善本ではないだろうか。但し、下巻が欠けているのが惜しまれるところである。

四　慶安五年刊本について

さて、今回、全文翻刻を試みるのは、国文学研究資料館所蔵の、外題『訳和集全』（〈内題〉『譯和和歌集』慶安五年刊一冊・風月庄左衛門）である。内題からすると、第一系統かと思われそうだが、書型は、もと五冊本であったものの合綴本である。本文の字配りや

匡郭の切れ目、また傷の位置など共通することから、承応二年刊本の『法花訳和集』と同版とわかる。但し、後で翻刻の【校異】欄を見ていただければわかる様に、第一系統との比較に用いた内閣文庫本との異同数ほどではないが、第二系統の承応二年刊『法花訳和集』とも、異なる箇所が少なくなく、今回掲載した70番歌のうちだけでも31箇所の異同が見られる。承応二年刊本の異同箇所は、慶安五年刊本の誤りを修訂するものであったり、和歌の句の表現を変えたものであったり、さらには「訳和一」の九丁目の後に、「又九」として、一丁分まるごと、和歌とその注を増補していたりもする。そこで、奥書が残っている第一系統の内閣文庫蔵『譯和和歌集』と、国文学研究資料館蔵『法花訳和集』（承応二年刊）とを対校本として用い、慶安五年刊本を全文翻刻紹介することとする。今後の『訳和集』研究の発展に繋げたい。

注

注1　『大日本佛教全書』第六三巻史伝部二

注2　昭和五十八年九月仏教文学会東部例会における口頭発表の折にとのことである。

注3　石川一「慈円と法華経廿八品和歌―法華要文百首について―」（『徳島文理大学論叢』創刊号・昭和五十九年）、「法華要文百首考」（『中世文学研究』第十四号・昭和六十三年）

注4　毛利みのり「法華経歌集類聚の方法―訳和歌集について」（大阪女子大学国文学科紀要『女子大文学』第四十四号所収・一九九三年）

注5　廣田哲通「轍塵鈔とその周辺」（『中世仏教説話の研究』（昭和六十二年・勉誠社）所収。『轍塵抄』は法華直談系の注釈書でありながら、各品の冒頭歌は、『訳和集』にすっぽりと入るかたちで、ほとんど重なることが述べられている。

注6　廣田哲通『中世法華経注釈書の研究』第三章「直談と和歌」（一九九三年・笠間書院）

注7　廣田哲通『中世仏教文学の研究』（二〇〇〇・和泉書院）

注8　高木豊「嘯月子『科註妙法蓮華経鈔』引載和歌考」（高木豊・冠賢一編『日蓮とその教団』所収・平成十一年・吉川弘文館）

注9　田島毓堂『法華経為字和訓の研究』（平成十一年・風間書房）

注10　引用は、九州大学松濤文庫所蔵寛文十三年刊（外題）『科註絵入法華経かな新註抄』（内題「科註妙法蓮華経鈔」・惣序三巻、題号一巻、抄目録一巻、本文八巻三十冊）に拠る。

注11　注4と同じ。

五　翻刻

《凡例》

・本編は国文学研究資料館蔵〈内題〉『譯和和歌集』（慶安五年刊）の全文翻刻である。紙面の都合上、今回は70番歌までとなったが、以後、随時掲載の予定である。

・本文は、通行の字体に改めたが、哥・帋・剱については、底本の字体を尊重した。また、ふりがなで「ソ」「冂」となってい

る箇所については、印刷の都合上「シテ」「コト」に改めた。
・和歌の頭にある算用数字は、便宜上、私に付した通し歌番号である。
・丁数は（　　）内に記した。
　例　（訳和一・一・オ）以下、単に（一・ウ）等と略す。
・各歌の後に、【校異】として、内閣文庫蔵『譯和和歌集』（江戸初期写、林羅山本）および国文学研究資料館蔵『法花訳和集』（承応二年刊本）と、底本との語彙の異同を挙げた。但し、仮名か漢字表記かの違い、振りがな、訓点の有無の差異に関しては、これを問わなかった。
・丸数字は行数を表す。（半面十行。）
・略号は、内閣文庫蔵本を［内］、国文学研究資料館蔵承応二年刊本を［承］とした。
・虫食いによる不明箇所は、□の記号を用いた。
・〈　〉内の文字は私による注である。

《書誌》

請求番号　タ2―128
書　型　大本一冊（五冊本の合綴）。縦二七・七糎、横一八・七糎。
表　紙　渋びき表紙。
装　訂　五つ目袋とじ。
題　簽　左肩に「譯和集全」と墨書打ち付け書き。
構　成　表見返しの後に遊紙一丁。
　序（計四丁）
　譯和和歌集一　※「無量義経」、「法華経」、※「序品」、「方便品」　（計三〇丁）
　譯和和歌集二　「第二巻譬喩品」、「信解品」、「第三巻薬草喩品」、「授記品」、「化城喩品」、「第四巻五百弟子受記品」　（計二八丁）
　譯和和歌集三　「人記品」、「法師品」、「寶塔品」「提婆品」、「勧持品」、「安楽行品」、「湧出品」　（計三一丁）
　譯和和歌集四　「第六巻壽量品」、「分別功徳品」、「随喜功徳品」、「法師功徳品」「第七巻不軽菩薩品」、「神力品」、「嘱累品」　（計二七丁）
　譯和和歌集五　「薬王品」、「妙音菩薩品」、「第八巻普門品」、「陀羅尼品」、「厳王品」、「勧発品」、「普厳経」　（計二七丁）
　裏見返しの前に遊紙一丁。　（総計一四九丁）
　※を付している章題は、実際には存在しないが、詞書や和歌の内容から見て明らかなので、ここに加えた。
内　題　譯和和歌集一（～五）
尾　題　なし。
刊　記　慶安五年仲春　風月庄左衛門
匡　郭　四周単辺。縦二〇・六五糎。上欄縦五・三糎。
板　心　「訳和序（～五）」　（丁数）」
蔵書印　訳和序一丁表に「刀水文庫」、「日埜蔵」、一丁裏の上欄に「富小路蔵」、「さぬき・たかまつ有岡印」、「国文学研究資料館」朱文陽印。

備考　章題および和歌の上には、〇の朱印が付されている。

（訳和序・一・オ）白紙

ことの葉は国によりておなしからすといへとも　（一・ウ）
ことはりは所にしたかひてかはる事なしむかし
釈迦如来西天に出たまひて五十餘の御のり
みな梵天の詞をかりて説給ひしかはその国
人さとる事をえたりさかひはるかにして東
土にわたる事仏かくれさせ給ひて後ちと
せあまりにもやなりにけむ後漢の明帝
のとき摩騰法蘭のふたりの聖ともなひて
梵篋をさゝけ来しかとも音韻かはりてこゝろ
を得る事かたかりしかは其国人にくみしてこそ
翻訳をは遂侍りつれ是を始としてあるひは
経論の本文を為て渡しあるひは如来の蜜
語をつたへきたる彼震旦のみならす十方世界
にひろめほとりなき衆生を利益しひろき
御めくみあげてかそふへからす中にも此大和
嶋根は粟散辺地といひなから円なるをしへを
うけ侍る事なをし黄葉の風をまちて落
なむとし清水の月をうかめてあきらかならん
とするにことならすしかあれは欽明のかしこき

（二・オ）

御代にくたら人仏像経巻を貢し奉りし
よりこのかた異域の三蔵は船にのせてはこひ
この国の沙門は浪をしのひてとふらふによりて
五千余巻の数のこらすその外四依の判尺まて
も渡りにき法の水は東に流るといへるも
ことはりにこそ粤に詩は唐国の諺として
こゝろさしをあらはし哥は和朝の風流とし
て思をのへ侍りかるかゆへにあめのした長閑なる
御代にはかならす是を興し浪の声しつかなる
時はみなかれをあつめ給ふ万葉集にはしまり
て新続古今集にいたるまてはたちあまりの
数になむなり侍りぬその中に万葉古今後撰
までは雑部の哥の中に釈教部類の哥みえ
侍らす拾遺集より以来そのたくひを載侍り
殊に千載新古今なとこそ経文を題として詞
の花を散し法門をもとゝして玉の響をふるふ
事おほくみえ侍れけたし俊成定家もこれを
ことゝして縁を結ひ慈鎮西行もその旨を得て
物をすくふならし爰に当世弘経の師人の耳を
驚し心をかたふけしめむがためにある時は五経六
籍の文章を弄しある時は長歌短哥の義理
をひろふ事侍りたとへをかり詞を引におなしを
しえのみち好処にちかけれはさとりしることや

（二・ウ）

（三・オ）

（三・ウ）

すし況やこの日のもとは毘盧遮那印文の地
なれはそのさへつり天竺の風俗にかよへりされは
達磨和尚はとみの緒川のなかれをおもひ菩提僧
正は迦毘羅衛の契をわするゝ事なししかある
によりて管見をもつて代〻の撰集のうちは
いふにおよはす浦〳〵にかきをけるもしほ草家
〳〵に払すてたることの葉の塵までも目に見
耳にきける程の経文法門の哥をかきしるし
名つけて訳和和歌集といふ季節にしたかひ
て花鳥風月をつぎ詞をさきとして雨露霜雪
をつらぬるにあらすたゞ経〻品〻の次第にまかせ
仏〻尊〻の位階をならふねかふ処おほからす
麁言も軟語も真如の海中に会してへた
つる処なく浅名も深号も平等性のうち
にこもりておもむきをわすれはてんと
いふことしかり

（四・オ）

（四・ウ）白紙

【校異】（一・ウ）①序題ナシ―訳和和歌集序　実海撰［内］、①ことの葉は―それことの葉は［内］、③釈迦如来―大聖釈尊［内］、③五十余―五十年余［内］、④梵天―梵文［内］、④かりて―かり［内］、④国人―国の人［内］、⑤えたり―えたりき［内］、⑦なりにけむ―成けん［内］、⑩かたかりしかは―かたかりきしかはあれと［内］、⑩国人―国の人［内］、（二・オ）②本文―梵文［内］、②渡し―きたり［内］、②如来の―如来［内］、③震旦―所［内］、③十方―あまねく十方［内］、④利益し―利益せし［内］、⑥粟―粟［内］、⑥なから―ナシ［内］、⑥をしへ―おしへ［内］、⑦侍る事なをし―侍へきことはなをし［内］、⑧なむ―なん［内］、⑧うかめて―うかへて［内］、⑩くたら―くたし［内］、⑩奉りし―奉りて［内］、（二・ウ）①のせて―のせしめて［内］、②しのひて―凌て［内］、③その外―ナシ［内］、③四依の―四依［内］、④渡りにき―わたりき［内］、④東に―東へ［内］、④いへるも―いへは［内］、⑤ことはり―ことわり［内］、⑤唐国―唐［内］、⑥風流―風［内］、⑧声―おと［内］、（三・オ）①になむなり侍りぬ―つもりぬ［内］、①雑部の哥―雑哥［内］、③その―そこの［内］、⑤ふるふ―うる［内］、⑥おほく―ナシ［内］、⑧すくふならし―すくふによるならし［内］、⑧弘経―仏経［内］、⑧人―ナシ［内］、⑨しめむ―しめん［内］、⑩義理―儀理［内］、（三・ウ）①詞―類［内］、①おなしをしえ―おなしそれおしへ［内］、④天竺―南天竺［内］、⑤なかれ―ゆくゑ［内］、⑥迦―加［内］、⑦代〻の―代〻［内］、⑧浦〳〵―うちく［内］、⑨払―はき［内］、⑩きける―きこゆる［内］、（四・オ）①名つけて―両巻となして名つけて［内］、①訳和和歌集―法花訳和集［承］、③まかせ―まかせて［内］、④ならふ―ならふる［内］、⑤麁言も軟語も―麁言軟言も［内］、⑤へたつる処―へたて［内］、⑥平等性のうち―平等性地の中［内］、⑦はてん

—はてむ［内］

訳和和歌集一　武州星野山実海撰　**（訳和一・一・オ）**

法花経部附開結二経

無量義経の四十余年　未レ顕ニ真実一の心を

蘊賢法師

1

今そしる四十年余のことの葉にあらはれさりし露の光を

釈迦如来は十九にしてがや城をいてゝ三十の御

とし成道し給ひてその朝より御説法あり

しに五十余年のあひたさま〳〵の経あり

されとも四十余年の説はみな法花経を

とき給はんかためのの方便なり仏寿七

十二歳にしてまさに法花経をとき給ふに　**（一・ウ）**

まつ序分の無量義経をとき給ふゆへ

にすきにし御のりはいつれも方便の説

なりいまこそ真実の理はあらはれ侍らめ

といふこゝろなりこと葉を露といふ事侍れ

は露といひ露は又ひかりあるものなれは

つゆのひかりをといへるなり

【校異】（一・オ）①②訳和和歌集一　武州星野山実海撰　法花経部附開結二経—訳和和歌集法花経部　附開結二経［内］—法花訳和集一　武州星野山実海撰　法花経附開結二経［承］、③心を—こゝろをよみ侍りける［内］、⑤今そしる—いまそみる［内］今そみる［承］、⑤四十年余—四十余［内］、⑤あらはれさりし—あらはささりし［承］、⑥にして—にて［内］、⑧経あり—経を説給へり［内］、⑨四十余年—四十年［内］、⑨説—説法［内］、⑩仏寿—仏寿の［内］、（一・ウ）①法花経—法花［内］、②とき—のへ［内］、③すぎにし—過にしかたの［内］、⑤こと葉を—こと葉の［内］、⑤いふ事侍れは—いひ侍れは［内］、⑥いひ—いふ［内］、⑦ひかりを—ひかり［内］

法印献円

2

四十年余なを忍ひけることの葉を今はと散す鷲の山風

おなし文のこゝろなりはうへんの序には真

実の理をはつゝみ給へはしのふといふ也わしの　**（二・オ）**

山は法花経とき給へる所なれはいまはとち

らすといふなり

【校異】（一・ウ）⑨集付ナシ—〈和歌ノ右肩ニ〉玉葉［内］、⑨四十年余—四十余［内］、⑨今は—今日［内］、（二・オ）②山—山風［内］、②法花経—法花［内］、③いふなり—云歟詞の葉の縁也［内］

後京極摂政太政大臣

3

胸の月けふのみ空を待とてや四十年の雲に雲かくれけむ

むねの月とはほとけの御むねのうちにふかく

秘し給ひし妙法はわしの御山のおりからを

まつとてや四十年のあひたはくもかくれして

あらはれすやありけんとなり四十年の雲は
まよひのくもなり四十をはまとはぬとし
と申ゆへにかくよみたまへるなり　**（二・ウ）**

【校異】（二・オ）⑤集付ナシ―秋篠［内］、⑤四十年―四十［内］、⑤けむ―けん［内］、⑥ほとけの―仏［内］、⑧四十年―四十余年［内］、⑨四十年―四十余年［内］、⑩四十―四十余［内］、⑩まとはぬ―まよはぬ［内］、（二・ウ）①ゆへに―故［内］、①なり―歟［内］

4

参議雅経

我も又四十年あまりは過にけり頼む心の光あらはせ
二千余廻のそのかみはもろ〳〵の衆生の心を
四十年にとゝのへてみな仏道を成せしめ
給へりそれをいま作者のわか年の四十年
におもひあはせてわかこゝろは四十年ふれ
ともなとむねのひかりをあらはさぬと責給へ
るこゝろなり

【校異】（二・ウ）③四十年―四十余［内］、④そのかみは―其かみ［内］、⑤四十年―四十余年［内］、⑤とゝのへて―調へ給ひて［内］、⑤成せしめ―ならしめ［内］、⑧むねのひかり―胸の月の光［内］、⑧あらはさぬ―顕し侍らぬ［内］、⑧給へる―侍る［内］

中納言為藤結縁経供養しけるに徳行
品のこゝろを　惟宗光吉朝臣　**（三・オ）**

濁えに影見るはかりすみかえて水こそ月の心なりけれ
是は彼品の中に菩薩の徳を讃るに其心
禅寂　常在二三一昧一といへる文あり心は仏も菩薩
もはしめはみな凡夫なれはにこれる心なるを
影のうつるはかりに定に入てすましたりといふ
心なり禅寂とは静なる義なり三昧とは座
禅の事なり

【校異】（二・ウ）⑩結縁経―周忌に結縁経［内］、（三・オ）②集付ナシ―新続古［内］、②かえて―かへて［内］、②けれ―けり［内］、④いへる―云［内］、④仏も―仏［内］、⑤はしめ―そのかみ［内］、⑤にこれる心―濁心［内］、⑥はかりに―斗にてよく［内］、⑦義―儀［内］

5

布二善種一子一遍二功一徳田一普下令二一切一発中菩提上と
いふ文を　選子内親王

6

かくはかり人の心にまかせたる仏のたねをもとめける哉
成仏の種は本来衆生の心中にある物に
してよそよりは植ぬもの也しかるをまよへる
ものそ身の外にもとむるはをろかなる　**（三・ウ）**

【校異】（三・オ）⑨⑩布～文を―ナシ［内］（三・ウ）②成仏の種は―是も布善種子遍功徳田普金一切発菩提心といへる文の心をよめるか成仏の種は［内］、②にして―にて［内］、③よそよりは―よそには［内］、④ものそ―ものゝ［内］

［承］、④をろかなる―おろかなるなり［内］

船師大船師のこゝろを　　前中納言定家

7

わたし守出す舟路は程もなし身は此きしに霧はれす共
これも菩薩の衆生をすくひ生死の大海を
渡して涅槃の彼のきしにつくるはさなから渡
もりの人を渡に異ならすされは煩悩の霧は晴
すとも程なく彼きしにいたらむとなり　**（四・オ）**

【校異】（三・ウ）⑦なし―あらし［承］、⑧すくひ―すくひて［内］、（四・オ）①いたらむ―至りなん［内］

後京極

8

ともつなは生死のきしにとき捨て解脱の風に艤せよ
一切衆生の生死の海に漂て出もやらぬを菩
薩の船師ともつなをとき捨て解脱の風の
吹くるにつけて船をもよほせとなり

【校異】（四・オ）②後京極―後京極摂政太政大臣［内］俊成［承］、③集付ナシ―秋篠［内］

扇ニ解脱風ニ除ニ世悩熱ニといへる心を　　法印源忠

9

山の端の雲に入日は残れとも涼しくなりぬ松の下風
哥の心あらはなり経文にあはせて見給ふへし

【校異】（四・オ）⑨集付ナシ―新拾遺［内］

題不知　　定家　　**（四・ウ）**

10

たのもしな光さしそふ三日月を世を照すへき初とやみぬ
法花経とき給はんとほのめき給へるほとけの
御かほはせ見奉るかことくそ侍んやみぬやは見
奉らぬとなり

【校異】（四・ウ）①題不知―ナシ［内］、①定家―前中納言定家［内］、②集付ナシ―玉葉［内］、④かことく―ことく［内］、④侍んやみぬやは―侍るとやみぬはやは［内］④見―見み［内］民部卿為藤一回に結縁経供養しける時無量義経十功徳品を

大江広房

11

しはし猶舟さしとめよ渡守のりをくれたる人もこそあれ
諸仏菩薩は生死の海のわたし守なれはすゑ
の世のわれらかためにしはしとゝまれと也　**（五・オ）**

【校異】（四・ウ）⑦経―経の［内］、⑨をくれ―おくれ［内］、（五・オ）①世―代［内］、〈11番歌ト12番歌ノ間ニ1首〉

除世熱悩致法清涼

六月の道ゆく人も思しる法の涼しさいたす誓を［内］

法花経

七十二歳説法花経の心を　　大僧正隆弁

12

七十年の春をむかへて説そめしのりの衣の花のしたひも
哥の心経文のこゝろあらはなり

【校異】（五・オ）③心を―心をよみ侍りける［内］、⑤むかへて―

13

かさねて［内］［承］

前中納言定家

のりの花きくの朝露やとりきてもらす数なき光をそまつ
是は聞といふ字を菊にもたせてよめり一字一句
をきくものも菩提のみちに入ぬれはもらす数
なきといふなり　**（五・ウ）**

【校異】（五・オ）⑧集付ナシ―愚草［内］、（五・ウ）①なきといふなり―なしとは云なり［内］

14

久安百首の哥の中に

皇太后宮大夫俊成

はるかにも匂ひける哉のりの花のちのいほとせ猶さかり也
鶯の御山の花はひと度咲て後五百歳の末
の世までもそのにほひかはらすとは法花経の
利益の尽せぬなるへし

【校異】（五・ウ）④集付ナシ―続後拾［内］、④いほとせ―いをとせ［内］、⑤御山―深山［内］、⑥とは―といへるは［内］、⑥法花経―法花［内］

15

妙法蓮花のこゝろを

後京極

わしの山八年ののりをいかにしてこの花にしもたとへそめけむ
万木のにほひ千種の花しな〳〵なるにとりわき　**（六・オ）**
蓮に此御のりをたとへける誠にその縁ありかた
き事をいへるなるへし経為二題一目一仏為レ眼知一汝
花一中植二善一根一といふ心歟

【校異】（五・ウ）⑧妙法蓮華のこゝろを―妙法蓮華を［内］、⑨後京極―後京極摂政太政大臣［内］、⑩集付ナシ―秋篠［内］、（六・オ）④といふ心歟―といへる心歟［内］

16

序品の如レ是我聞のこゝろを

前大僧正慈鎮

いはし水いまいふ人のことの葉のさなからうかふ御のりなりけり
仏法大海水流入阿難心とて仏の説給へる御法の
水はみな阿難尊者の心の海へなかれつたはりて
すゑの世を利益し侍る也殊に仏の説にすこ
しもたがはぬ事をさなからうかふといふ也　**（六・ウ）**

【校異】（六・オ）⑦御のり―流［内］、⑧給へる―給ふ［内］、⑧御法の―御法［内］、⑨つたはり―つたわり［内］、⑩侍る也―侍れはなり［内］

17

序品のこゝろ読侍りけるに

藤原伊綱

春ことに歎しものを法の庭ちるかうれしき花も有けり
春の花を惜むによりて咎なき風を恨雨を厭
は世の常の人の心ならひなるに法花経ときそ
め給ひし時天より曼陀曼殊とて四の花の
降くたりしをは一会の大衆みな悦ひあへり
かゝるためしも世にはありけると也

【校異】（六・ウ）②けるに―ける［内］、⑤恨雨を厭は―恨侍るは［内］、⑦とて四の花の―といふ花［内］、⑨ためしも―ためし［内］

権中納言行成

18 昔みし花の色〳〵散かふはけふの御法のためし成らん　**（七・オ）**

いまの釈迦の鷲の御山の春のみならすいにしへ
燈明仏と申せし仏の法花経とき給ひし時
かゝる花の降てこそ侍しされはけふも又しかるへ
しとたのもしくそ侍りける

【校異】（六・ウ）⑩権中納言―権大納言［承］、（七・オ）①集付ナシ―新勅［内］、②いまの―今［内］、③時―時も［内］、④侍し―侍しか［内］

久我内大臣

19 法のためのへし深山の苔むしろまつ色〳〵の花そ降しく

【校異】（七・オ）⑦集付ナシ―玉葉［内］

西行法師

20 散まよふ花の匂ひを先たてゝ光を法の筵にそしく

【校異】（七・オ）⑨集付ナシ―風雅［内］、⑨まよふ―まかふ［承］、

21 花の香をつらなる袖に吹しめてさかりを風の散すなりけり　**（七・ウ）**

三首まへにおなし

【校異】（七・オ）⑩集付ナシ―出家［内］、⑩袖―軒［承］、⑩さかり―さとりを［内］さとれと［承］、（七・ウ）①まへにおなし―同前［内］

源家長朝臣すゝめ侍りける一品経の哥の中に序品の心を読侍りける

藤原為家朝臣

22 またしらぬ空の光にふる花は御のりの雨のはしめ成けり
法花経の会座には八万の菩薩万二千の声
聞その外天竜八部かす限もなく袖を列て座せ
り香はしき風ふきて花の匂ひを袖に吹しめ
たる外には御のりの花とてもあらしと云心歟

【校異】（七・ウ）③読侍りける―ナシ［内］、⑤集付ナシ―新後拾［内］、⑤光に―光を［内］、⑥二千―二千人［内］、⑦限もなく―限りなく［内］、⑦座せり―列座せり［内］、⑧香はしき―かんはしき［内］

権中納言雅縁

23 今そしる御のりの花もふるき世にためし有ける人のをしえを　**（八・オ）**

【校異】（八・オ）①集付ナシ―新続古今［内］

人のもとに一品経供養しける時序品の心を

皇太后宮大夫俊成

24 残なくてらす光に尋れは昔のこともくもらさりけり
序品の時六の瑞相ありけるを驚て一会の大衆
に替て弥勒菩薩文殊大士にいかなる法をとき
給はんとてかゝるふしきの事を現し給ふそと問

給ひしにむかし燈明仏と申せし仏の世にかゝる
瑞相侍しにすこしもたかはすされは六の瑞相
を見せしめ給ひては法花経といふ経をこそ宣給
ひしかそのことくいまの釈尊も又さこそ侍らめと
答しにほゞこれを聞てみなゑみをふくみ悦ひを
なして待奉るとみえ侍り今の前首の哥
にふるき世といひ昔の事といへるはかれをさす
なるへしまへの哥は昔を引て今の事をはか
り後の哥はいまをもつて昔をはかりしる心也

（八・ウ）

【校異】（八・オ）⑦給はん—給はむ［内］、⑧給ひしに—給へは［内］、⑧世に—世にも［内］、⑩いふ—申［内］、（八・ウ）①さこそ—さこそは［内］、③待奉る—待奉り侍し［内］、⑤はかり—はかり云［内］

25

清少納言

白妙の光にまかふ色みてやひもとく花を兼てしるらん

【校異】（八・ウ）⑦清少納言—清少納言女［内］［承］、⑧集付ナシ—新拾遺［内］

26

前大僧正慈鎮

昔をもさやかにそ見る出る日にむかふ光のくもりなけれは

【校異】（八・ウ）⑨詞書ナシ—照于東方の心を［内］、⑩集付ナシ—新続古今［内］、⑩くもり—白雲［内］

入道親王尊円

（九・オ）

27

春のくるかたをてらして法の花ひらくる時を世にそ知する
白妙の光とは六の瑞相の中に放光瑞とて仏
のふたつの御眼のあひたにしろき毫ひと筋
あり右に巻て針のことし彼毛より光を放て
霊鷲山より東のかた一万八千の仏国を照し給
へり現在諸仏の道のかはり侍らぬ事を大衆
に見せしめむと也ひもとく花とはかの瑞をみ
侍りて法花経とき給はん事を兼てしると
なり出る日にむかふ光といへるもおなし事なる
へし又春のくるかたを照すといへるも春はひか

（九・ウ）

しよりいたるなれはかくいへり

【校異】（九・オ）②集付ナシ—続千載［内］、④眼—眉［内］、④毫—毛［内］、⑤あり—侍り［内］、⑤針—銀の筒［内］、⑧見せしめむと也—みせしめんとして［内］、⑧瑞をみ侍りて—瑞相をもちて［内］、⑨給はん—給はむ［内］、⑩出る日に〜又—ナシ［内］、（九・ウ）②いたる—至れる［内］

28

寂然法師

吹風に花たちはなや匂ふらん昔おほゆるけふの庭哉
栴檀の香はしき風の吹を聞侍りて大衆みな
悦あへるを大衆心喜瑞と申侍りされは橘に
むかしを思ふこと常の事なれはかの作者花た
ちはなの匂ひに鷲の御山のいにしへさこそとおも

ひやりたるこゝろなるへし

【校異】（九・ウ）⑤集付ナシ―新古［内］、⑧こと―ナシ［内］、⑧かの―今彼［内］、⑨匂ひ―風の匂ひ［内］、⑨さこそと―さこそはと［内］、〈28番ト29番歌の間ニ2首〉

此非小縁のこゝろを

法橋能星

朧けに蜑のかつきも宮司も御調はおなし大君のため

同し文のこゝろを

同作者

おほろけの蜑やはかつくいせの海の波高き浦に生るみるめは

はしめのうたの作者天竺にては

霊山の地主明神金毘羅神に仕

へ奉り弥勒と現じ漢朝天台山

にては神僧に仕へたてまつり

竜樹菩薩と名つく我朝にいたり

ては王城の鎮守四明の神明に仕へ

奉り能星と名つく事これおほろ

けのゑんにはあらすといへりしかるに嵯

峨の帝は御誕生のいのりを日吉の社に

て執行し給ふ御願成就の時よみ給

ふとなりかるかゆへに能星を下七

社第一の宮と勧請なし下す今

の小禅師宮これなり次の哥の心も

大旨はおほろけのゑんにあらすとなり［承］

29

人〻かは堂にして勧学会をこなひ侍りけ　**（一〇・オ）**

るとき入二於深山一の文をよみ侍り

藤原仲実朝臣

鳥の音もきこえぬ山にきたれ共まことの道は猶うとき哉

鳥の音のきこえぬとは深山の事なりかゝる奥

ふかく住居してもまことの道は入かたきも

のなりけると也

【校異】（一〇・オ）①かは堂にして―賀堂にて［内］、①侍り―ナシ［内］、②文をよみ侍り―文の心を［内］、④集付ナシ―新続古［内］、④うとき―遠き［内］とをき［承］、⑤音の―音も［内］、⑥ふかく―深き［内］、⑥しても―にても［内］、⑥道は―道には［内］

保延二年勧学寺にして三十講おこなひ侍

りけるに

民部卿頼

30

独のみ尋いるさの山ふかみまことの道を心にそとふ

ふかく身を樹下石上にをき侍りて内証真実　**（一〇・ウ）**

の道をは工夫し侍るとなり

【校異】（一〇・オ）⑧にして―にて［内］、⑧おこなひ―をこなひ［内］、⑩集付ナシ―玉葉［内］、（一〇・ウ）②侍るとなり―侍りて知なり［内］

前大僧正慈鎮

31

吉野山おくのすみ家を尋つゝ仏の道は是よりそしる

まへの哥にまことの道といへると今又仏のみち

といへるおなし事なり

【校異】（一〇・ウ）④集付ナシ―拾玉［内］、⑤いへると―いへる［内］、⑤又―ナシ［内］、⑥いへる―いへるは［内］

32

悉捨王位の文をよめる

よみ人しらす

法のためと思ふ身なれは皇の跡をたにこそ跡を捨しか
むかし燈明仏と申せし御仏凡夫にてわたらせ
給ひしとき八人の王子をもち給へり父の大王**（一一・オ）**
御位をすめらせ給ひて成等正覚ならせ給ぬ
と聞てやかて八人の御子たちも御代をいとはせ
給てまことのみちにおなしくいり給ひしと也
釈尊の羅睺羅尊者これにかはらすと説なり

【校異】（一〇・ウ）⑦の文をよめる―ナシ［内］、⑨たに―さへ［内］、⑨こそ跡を―こそあたに［承］、⑨か―は［内］、⑩にて―に［内］、（一一・オ）②すめらせ―すへらせ［内］、③代―世［内］、④給て―給ひ［内］、⑤釈尊の―今の釈迦仏の［内］、⑤かはらす―からす［内］、⑤説なり―説たること也［内］

33

未嘗睡眠の文をよめりける

選子内親王

ぬる夜なく法をもとむる人あるを夢の中にて過す身そうき
ねふりはおこたりの基なれは仏道にはふかく誡
給ふされは仏の三乗の御弟子はいさゝかもねふ
らすたゆみなく道をまなひ給ふにわれらこと**（一一・ウ）**
きのつたなき身のなかき夜のねふりのうちに
さめもやらすしてあかしくらすとなけく心也

【校異】（一一・オ）⑥の文をよめりける―ナシ［内］、⑧集付ナシ―新拾遺［内］、⑧あるを―も有を［内］もあるを［承］、⑧中―内［内］、⑧過す―過る［承］、⑩給ふ―侍り［内］

34

仏此夜滅度如薪尽火滅の心をよみ侍り

法性寺入道前関白太政大臣

人しれす法にあふ日を頼むかな薪つきにし跡に残りて
薪尽火滅と申は度すへき衆生をはみな度し
給ひて仏の涅槃に入給ふをたとへていふ也前
仏入滅の跡に漂ていつとなく仏法にあはん事を
頼みぬることのはるかなることをなけくよし也

【校異】（一一・ウ）④よみ侍り―ナシ［内］、⑤前―ナシ［内］、⑦をは―を［内］、⑧たとへていふ也―たとへ云也されは［内］、⑩ことを―を［内］

35

我見燈明仏本光瑞如此以是知今仏欲説法花経の文のこゝろを

源有長朝臣

昔みし春の光のかはらぬはいまそ御法の花や咲らむ

（一二・オ）

【校異】（一二・オ）②の文のこゝろを―ナシ［内］、④集付ナシ―続千載［内］、④かはらぬ―かわらぬ［内］、④いまそ―今も［内］いまも［承］、④花や―花そ［内］［承］、④〈和

36

歌ノ注ナシ）―是は弥勒の仏のかく寄物なる瑞相ともを現し
給ふはいかなる事か侍らんと思ひしに文殊のこたふる詞なり
我とは文殊の我身昔みつる瑞相を今とはかりあはてたゝ法花
経とき給はむする時莨の出たるよと云心なり［内］

前大僧正慈鎮

ともし火の光をさしてこたえすは御法の花を誰か待みん

【校異】（一二・オ）⑥集付ナシ―新続古［内］、〈和歌ノ注ナシ〉
―ふる枝の字に縁の心をもたする常の事也仏種従縁起なれは
機縁なくして仏法はおこらぬ物なり機によつておこるをふる
枝に咲とはいへりもと見し人は文殊なり［内］

大上天皇

37

法の花いまもふる枝に咲ぬとはもとみし人や思ひ出らん
ふる枝の枝の字に縁の心をもたする常のこと
なり　仏種　従レ縁起なれは機縁なくして仏法
はをこらぬものなり機によつてをこるをふる枝（**一二・ウ**）
にさくとはいへりもとみし人は文殊なり

【校異】（一二・オ）⑦大上天皇―ナシ［内］後嵯峨院御製［承］、
⑧37番歌ナシ〈但シ注ハ36番歌ノ後ニ有リ〉［内］

38

其後当二作仏一号　名　曰二弥勒一のこゝろを

前大僧正慈鎮

わしの山入ゆく月の跡に又いつへき御名を聞そうれしき
法花は諸仏大事の因縁なれは是を説給へは
かならす滅度し給ふなりしかるにやかて涅槃し給て跡のやみちいかゝせむと思ひ侍り
しに弥勒仏跡をつゐてこの世界の教主にわ
たらせ給はむ事をきくに歎のなかの　悦　となり

【校異】（一二・ウ）③のこゝろを―ナシ［内］、⑥大事の―大事
［内］、⑦し給ふなり―し給ふ習なり［内］、⑧侍りしに―
侍るに［内］、⑨つゐて―つきて［内］、⑨教主に―教主に
て［内］、⑩給はむ―給はん［内］、

（**一三・オ**）

待賢門院の中納言人〻すゝめて廿八品の
哥よませ侍りけるに広度二諸衆生一其数
無レ有レ量の心を読侍りける

皇太后宮大夫俊成

39

渡すへき数もかきらぬ橋柱いかにたてける誓なるらん
菩薩最初発心のとき衆生は無辺なれ共度
しつくさんと誓をたて給ひて仏にならせ給
へはその願をみて給ふ事なり彼弥勒仏かく
いとはかりなき衆生をすくひ給ふはいかゝちかひ
そめ給ひしと思ひやりたる心也橋は人を渡す物
なれはたつるといふ縁語によりて橋柱とはいへり

（**一三・ウ**）

【校異】（一三・オ）③読侍りける―ナシ［内］、⑤集付ナシ―新古
［内］、⑧弥勒仏―弥勒は［内］、⑩橋―橋柱［内］、（一
三・ウ）①とは―と［内］

母の周忌に法花経をみつからかきて巻〻

40

の心をよみ表紙の絵にかゝせけるに一巻の心を

前中納言定家

哀しれ春のそなたをさす光とは前に申せしことく仏
　春のそなたをさす光わか身につらき二月の空
　の眉のあひたの光東方を照す事なり我身
　につらきとは八年に法花経を説給ひて二月
　十五日入滅し給へは跡に残れる身をなけくよし
　なりされはかくすゑの世にたゝよふわれらをあ
　はれみ給へといふ心を哀しれといふなり又母の**（一四・オ）**
　周忌の追薦のためによみ侍れはかのうせにし
　月日や二月なりけむ尋ぬへし

【校異】（一三・ウ）③よみ—よみて［内］、③一巻—一の巻［内］、⑦眉のあひたの光—眉間白毫の光［内］、⑦照す—照したまひし［内］、⑦事なり—事也春は東よりいたる故にかくいへるさて［内］、⑧を—ナシ［内］、⑩われら—迷ひの我等［内］、（一四・オ）①といふなり—とはいへり［内］、②うせにし—みせし［内］、③けむ—けん可［内］、③尋ぬへし—尋之［内］

41

方便品

法花経廿八品の哥の中に方便品の心を読給

伝教大師

へりける

三の河ひとつの海となる時は舎利弗のみそまつ渡りける
　三の河をは三乗の権法にたとへ一の海をは一乗
　の妙法に類し侍り昔は三乗の教をのくにし
　てへたつる事河のなかれのまちくなるかこと
　くいま法花経のとき三乗も一乗の外になし**（一四・ウ）**
　とあらはし侍るゆへにいまの品をは方便品と申
　なり此とき舎利弗利根なれはやかて法の
　まゝにさとり侍りされはこそ舎利弗のみ一味
　の大海をまづ渡るとはよめるなり三乗の法と
　は四諦十二縁六波羅蜜の法なり

【校異】（一四・オ）⑤方便品の心を読給へりける—ナシ［内］、⑧河をは—川とは［内］、⑩へたつる—へたゝれる［内］、⑩ことく—ことし［内］、（一四・ウ）②侍る—侍り［内］、②方便品—方便［内］、④まゝに—まゝにて［内］、④されはこそ—さてこそ［内］、⑤法とは—法と云は［内］、⑥縁—因縁［内］

42

其智恵門難レ解難レ入といへる文をよみ侍り

皇太后宮大夫俊成

いりかたくさとりかたしときく門をひらくは花の御法なりけり
　菩薩声聞なと申人さへ昔は入かたかりし智
　恵の門なりしかるをいまはをしひらひてあまね**（一五・オ）**
　くわれらこときの凡夫までも此門にいり侍
　りたゝ此経の徳用といふ心なり

【校異】（一四・ウ）⑦といへる文をよみ侍り—といふ心を［内］、⑧皇太后宮大夫俊成—俊成［内］、⑨ひらくは—開は［内］

43

ひらけは［承］、⑩かたかりし―かたき［内］、（一五・オ）①をしひらひて―おしひらきて［内］、②侍り―侍ると［内］、③といふ―なりと云［内］

前大僧正慈鎮

仏たちさとれる宿の門なれはまよふわれらは入かたきかな

【校異】（一五・オ）④前大僧正―大僧正［内］、〈和歌ノ注ナシ〉―此智恵門に出入て実相の王宮に心よくあそひ侍ることの有かたきことわりなりたゝ仏と仏とのみ覚りしる道なれはとなりさりなから今此経にあへるは仏とともに彼門に入かの理をえしと也［内］

44

諸法実相のこゝろを読侍りける

津の国のなにはのこともまことゝは便の門のみちよりそしるかやうの哥を序の哥と申なりなにはといはんとて津の国といふよろつのことをいはんとて難波と申侍り四十余年のいにしへはよしあしをはるかにわかち方便と真実とをへたてつるか法花経にしては方便の門をそのまゝとりもなをさす実相とときあらはし侍れは難解難入の門といへともたゝ方便の門より入にけりとなり **（一五・ウ）**

【校異】（一五・オ）⑥のこゝろを読侍りける―ナシ［内］、⑦なにはの―なにの［内］、⑧申なり―申侍る也［内］、⑨いふ―いひ［内］、⑨ことを―ことゝ［内］、⑨いはん―いはむ［内］、（一五・ウ）②法花経にしては―法花にては［内］

45

十如是の中の相如是のこゝろをよめり

後京極摂政太政大臣

朝ことの鏡のうへにみし影のむなしかりける世にやとる哉色相のあらはるゝを相如申ゆへに鏡にうつる影をとりいたし侍りされは鏡の中のかたちはありとはみえてしかもはかなきものなれはたゝ

（一六・オ）

此世のむなしきありさまはひとへに鏡にうつれる影のことしといへり

【校異】（一五・ウ）⑥中の―哥の［内］、⑥のこゝろをよめり―ナシ［内］、⑧みし―みる［承］、⑨色相の―色に［内］、⑨相如―相と［内］［承］、⑩されは―ナシ［内］、（一六・オ）②鏡にうつれる影のことしといへり―彼うつれる影のことくとなり［内］

46

前中納言定家

跡もなきむなしき空にたなひけと雲のかたちはひとつならぬを心まへにおなしたとへ鏡のかけと空の雲とによそへたる差別なりひとつならぬとは雲のやうになるを一切の事〻物〻の色相のかはりたるにたとへ申なり

【校異】（一六・オ）⑤なき―なく［内］、⑤たなひけと―たなひける［内］、⑥心まへにおなし―是は前におなし［内］、⑥鏡のかけと―鏡と［内］、⑦よそへたる―よそへる［内］、⑦

なり—はかり也［内］、⑧かはりたるに—かはるに［内］、⑨たとへ申—たとへたる［内］

前大納言為尹

47 跡もなくむなしき雲のそのまゝに緑の空そあらはれにける　（一六・ウ）

是も又心おなし但雲のたちしをみとりの空

といへるところ本来実相と申こゝろなり

【校異】（一六・ウ）①むなしき雲—たゝうき雲［承］、①空—色［内］、①ける—けり［内］、②是も—是［内］、②たちし—たゝち［内］、③ところ—は［内］

性如是のこゝろをよみ給ひける

後京極

48 さま〳〵にむまれきにける世ゝもみな同し月こそ胸にすみけれ

地獄鬼畜人天修羅も一仏性をそなへすとい

ふ事侍らねはおなし月は胸にすむと申なり

【校異】（一六・ウ）④のこゝろをよみ給ひける—ナシ［内］、⑤後京極—ナシ［内］、⑦地獄鬼畜—地獄鬼畜も［内］、⑧月は—月こそ［内］、⑧なり—なれ［内］

定家

49 濁えやを川の水にしつめともまことはおなし山の端の月

にごりは悪道川は善趣にたとへたりしかれとも

胸の月はすこしもかはらすとなり　（一七・オ）

【校異】（一六・ウ）⑨定家—ナシ［内］、（一七・オ）①にごり—濁江［内］、①川は—小川をは［内］

為尹

50 風わたる池のうき草とたえしてすみける物を夜はの月影

うき草にへたてらるれは水にすむ月ともしら

す侍れとも風の吹はらふをみれはおなし月なり

【校異】（一七・オ）③為尹—ナシ［内］、⑥とも—と［内］、⑥月なり—月となり［内］

二条院讃岐

51 すむとても思ひも知ぬ身のうちにしたひて残る有明の月

人〳〵具足の仏性をも迷るをの〳〵の心に知すといふ也

【校異】（一七・オ）⑧集付ナシ—新勅［内］、⑨心に—心には［内］、⑨といふ也—となり［内］

体如是のこゝろをよみ侍りける

後京極

52 春の夜の煙に消し月影ののこるかたちも世をてらしけり　（一七・ウ）

双林の煙に丈六の金身のかくれ給ふと凡

夫は見奉れともまことに方便現涅槃なれ

は仏体は常住ふ滅にしてたえす世をてら

し給ふなり

【校異】（一七・オ）⑩のこゝろをよみ侍りける—ナシ［内］、（一七・ウ）①後京極—後京極摂政大臣［内］、②消し—消て［承］、②かたち—姿［内］すかた［承］、③金身の—金軀は［内］、④とも—と［内］、④まことに—まことは［内］、⑥

なり―となり［内］

定家

53 かり染の鶴のはやしの名をたてし煙のまゝのかたちをそ見る
三世常住の生滅なりかるかゆへに二月なかはに
うせ給ふといへともやかて卯月の初に誕生し
給ふとなり　**（一八・オ）**

【校異】（一七・ウ）⑦定家―前中納言定家［内］為尹［承］、⑧かり染の―かりそめに［内］、⑧まゝの―後の［内］、⑧かたち―姿［内］、⑧〈かり染めの～見るノ和歌〉―是やさは消し霞の行ゑかはやかて卯月の光をそみる［承］、〈⑨～（一八・オ）①マデノ和歌の注〉―鶴林入涅槃と申せしはたゝかりそめの方便示現とて申しますなり［内］、〈53番歌と54番歌の間ニ1首〉前大納言為尹　是やさは消し霞の行末はやかて卯月の光をそみる［内］、〈是やさは～ノ歌ノ注トシテ〉⑩初に―始めには［内］、⑩誕生し給ふとなり―誕生と申也［内］

入道二品親王法守

54 有なしのふたつの道にとゝまらぬ法やまことの姿なるらん
有無の二道にかたをちすして空有不二な
るところこそまことの中道実相の体なれはと也

【校異】（一八・オ）②集付ナシ―新千［内］、③二道に―二道［内］、③かたをちす―かたおちせす［内］、③不二―二［内］、④なれはと也―なれとなり［内］

力如是のこゝろを

後京極

55 降つもる雪にたはまぬ松かえの心つよくもはるを待かな

【校異】（一八・オ）⑤のこゝろを―ナシ［内］、⑥後京極―後京極

摂政太政大臣［内］

定家

56 みなれさほ岩間に波はちかへともたゆますのほる宇治の川舟

【校異】（一八・オ）⑧定家―前中納言定家［内］、⑨波―浪［内］

為尹

57 岸なたれ岩にもたるゝふし松のこれより後は風しほるとも
三首ともに哥のこゝろおなしいつれも力といふ
は物にをかされすしてわか体をたもつてとをる
を申侍りされは功能為力とて一切の物の
功を力とは申なり　**（一八・ウ）**

【校異】（一八・オ）⑩為尹―前大納言為尹［内］、（一八・ウ）①とも―哉［内］、②哥の―其［内］、③たもつて―もちて［内］、⑤申なり―申侍る也［内］

作如是の心を読侍りける

後京極

58 日をへつゝ巣かくさゝかにひとすちにいとなみくらすはてをしらはや

【校異】（一八・ウ）⑥の心を読侍りける―ナシ［内］、⑦後京極―

59 後京極摂政太政大臣［内］
定家
水こえし川そひを田のかたあらしおこせやさらはすゑをたのみに
【校異】（一八・ウ）⑨定家―前大納言為尹［内］為尹［承］、⑩川そひを―河そひに［内］、〈59番歌ト60番歌ノ順番入レ替ワリ〉―［内］

60 為尹
春の田の心をつくる山かつもうふるさなへそ色にいてける
人間の万事いつれをはてともなくあけくれ
いとなみ侍るありさまのあはれなりと也
【校異】（一九・オ）①為尹―前中納言定家［内］定家［承］、〈③～④ノ和歌ノ注、59番歌ノ後ニ有リ〉―［内］
因如是のこゝろを読侍りける

（一九・オ）

61 後京極
種しあれは仏の身ともなりぬへし岩にも松は生ける物を
【校異】（一九・オ）⑤のこゝろを読侍りける―ナシ［内］、⑥後京極―後京極摂政太政大臣［内］

62 定家
種まきし春をわすれぬ妻なれや垣ほに忍ふやまと撫子
【校異】（一九・オ）⑧定家―前中納言定家［内］、⑨忍ふ―咲る［内］

63 為尹
苗代のあせぬりたてゝまく種にさなへとるへき比もみえけり

（一九・ウ）

一切の万法みな種なくして菓をなすこと侍ら
すそのことく仏果の位にいたるにはかならす万行
万善の修因をつまねはなりかたし因なくして
果をもとむるを無因得果とて仏道には大に
きらふみちにて侍り
【校異】（一九・オ）⑩為尹―前大納言為尹［内］、（一九・ウ）④万善の―万善［内］、⑤もとむるを―もとむるは［内］、⑥侍り―侍りけり［内］
縁如是のこゝろを読りける

64 後京極
岸にいたる風のしるへを思ふかなくるしき海に艤して
たとへは因あれとも縁なけれは一法も生する
事なし一切の法は因縁和合して生する
ならひ也それをたとふるに舟は因風は縁いたる
所は果なり
【校異】（一九・ウ）⑦のこゝろを読りける―ナシ［内］、⑧後京極―後京極摂政太政大臣［内］、⑨艤―舟よそひ［内］、⑩たとへは―たとひ［内］、（二〇・オ）②たとふるに―たとふる［内］

（二〇・オ）

65 定家
年を経て子日になるゝ姫小松ひくにそ千代の影はみえける
松のちとせをふるは因のことし子日して引は

縁なり是によつてよはひを身にうくる果
となるへし

【校異】（二〇・オ）④定家―前中納言定家［内］、⑤千代―千世［内］、⑤影―陰［内］、⑥ちとせ―年、⑦よつて―よりて［内］、⑦よはひ―松のよはひ［内］、⑦うくる―うつるは［内］、⑧となるへし―なるへし［内］

為尹

66 はしらかす奥津舟人いまはゝや風をしるへの江にやよるらん
まへのうたにおなし

【校異】（二〇・オ）⑧為尹―前大納言為尹［内］、⑨奥―沖［内］、⑨よる―もる［内］、⑩まへの―さきの［内］、⑩におなし―になし［内］

前大納言宗明　**（二〇・ウ）**

67 山川のおなしなかれを結ひても猶あさからぬ契をそしる
こゝろあきらかなり但山川はあさき物なりそれを
汲てもふかき契をしるといへるところ作者の
ものなり

【校異】（二〇・ウ）②川―河［内］〈67番歌ト68番歌ノ間ニ1首〉―藤原盛能　新続古むくひ有身をはしらすや憂ことの道ぬまゝに世を恨つゝ　ことのはをそふるにをよはす［内］

果如是の心を読給ひける

後京極

68 秋ふかくなりはてにけるみ山かな花見し枝にこのみ色つく

【校異】（二〇・ウ）⑥の心を読給ひける―ナシ［内］、⑦後京極―後京極摂政太政大臣［内］

定家

69 袖の香をよそへて植したち花も朝をく露にみを結ふまて

【校異】（二〇・ウ）⑨定家―前中納言定家［内］

為尹　**（二一・オ）**

70 秋ふかみおちて木かけの柴くりの木のみをしほる山風そ吹
三首の心おなし花を因といひこのみを果
といふなり

【校異】（二一・オ）①為尹―前大納言為尹［内］、②ふかみ―ふかく［内］、②木のみ―果［内］、④いふなり―云り［内］

付記　本稿の翻刻については、国文学研究資料館および内閣文庫に御許可を賜った。ここに深甚の謝意を申し上げる次第である。

（うちの　ゆうこ・九州大学大学院博士後期課程）